

堀河院御時百首和歌題詠覚書 田辺愛子

堀河百首は和歌史上大きな位置をしめ、題詠發達の歴史には欠くことの出来ない存在である。特に、堀河百首題は後代の多くの歌人によって詠まれ、題詠の模範とされてきた。その堀河百首題は堀河百首成立以前の勅撰集、百首歌、歌合等にも取り上げられない歌題がいくつか含まれている。たとえば、四季の歌題だけをみると、呼子鳥・杜若・蓮・氷室・泉・權花・炭竈・埋火等がみられる。(これらは萩谷朴著『平安朝歌合大成』において堀河百首成立以前に歌合題として見られないものである。)

このような堀河百首題の特色であるあまり取り上げられなかった歌題に注目し、それらの歌題をどのようにとらえ、また、どのように詠まれているかを分析することは、堀河百首時代の題詠意識を考察するための一つの作業である。その作業には群書類従本を使用した。歌番号はその通し番号である。今回は、四季の歌題のうち泉・氷室・炭竈・埋火の四歌題について行なってみた。

▲泉▽

泉は『万葉集』以来、勅撰集に歌材としてはみえるが歌題とされしていない。堀河百首をいくつかの類型に分けてみると、十六首のうち

ち、「古今集」40の歌を典拠とし、清水を詠んだ歌(531・534・538)は数少なく、それに対して「華」「むすぶ」を用いて清水や泉の清涼さを歌意とした歌が数多くみられ、その中で夏を知らずとか扇の風を忘れるという間接的表現によって清水や泉の涼しさを詠んでいる歌は

529 六月に岩もる清水むすはすは扇の風をわすれまじやは

530 八重葎しけみか下にむすふておるほろの清水夏もしられす

とあり、530の歌の発想は『拾遺集』131の恵慶法師の歌を典拠としているように思える。

次に、縁語、懸詞によった歌は泉の縁語の「澄む」に「住む」を懸けて、「住む」の縁語で「宿」をひいている歌がみえ、その中に単に涼しさを詠むのではなく、泉に秋が住んでいるからという機知に富んだ発想がみられる。

537 わきかへる泉の水のすむ宿はまた夏なから秋そきにける

540 むすぶての袂すすしくなりゆくは泉に秋のすむにやあるらん

542 たちよれはすすしかりけり夏衣秋やいすみの底にすむらん
さらに536の俊頼の歌では

536 さらし井の木下陰にゆきふれば衣手さむし蟬はなけとも

「さらし井」の縁語「衣手」、「行き」に「雪」を懸け、「雪」から「さむし」をひくという技巧を凝らしながら、しかもこの歌は『常陸風土記』那賀郡の条を典拠としていると推察せられ、俊頼独自の個性的な詠法によって作られている。

泉の特徴としては珍しい歌語や歌枕の使用が注目される。歌枕は「おほろの清水」(530・533)「なまくりの湯」(539)があり、あまり取り上げられておらず、「おほろの清水」は『後拾遺集』1037・1038にあるのみで、「なまくりの湯」はわずかに『後拾遺集』643(「相模集」136)のみである。歌語は「板井の清水」(535)「さらし井」(536)「真清水」(541)などがあり、いずれも『万葉集』にみえる語で、特に、535の歌は神楽歌の採物、「杓」を典拠として、眼前の泉の状態を詠んでいる。

535 影みればやしら波のよする哉板みの清水むすふ雫に

このように、「古今集」以来の修辭や万葉語などの新奇な歌語等を取り入れるという試みがなされている。

△氷室▽

氷室とは、氷を夏まで貯蔵しておくための特別な室のことで、それを歌材としたことは珍しく、勅撰集においては『後拾遺集』221に見えるのみで、取り上げられることの少ない歌題と言えよう。堀河百首においては、夏の暑さを知らないことやその涼冷さを詠んだ歌が多くみえ、「松ヶ崎」「長坂」「氷室山」という地名が詠み入れられ、涼しさを歌意とした歌が五首(516・517・518・521・523)あり、「長坂氷室」「松崎・氷室」という型では平安時代において堀河百首の歌が初出例である(『平安朝和歌歌枕地名索引』)。

類型としては次のようである。『日本書紀』仁德天皇の六十二年にあるように、四月一日から九月末日まで供御の水を奉るといふ、仁德天皇以来続けられている行事をふまえながら、皇室の繁栄や皇威の意を込めている歌としては

519 つけのにおほ山守かおさめたる氷室そ今も絶せさりける

520 皇のみことのすゑも絶せねはけふも氷室におもたつか

523 皇のかしこぎ御代のしるしには氷も夏のものところそきけ

がみえ、519の歌は仁德紀六十二年の氷室の起源説話を典拠としている。また、520俊頼の歌には「おももの」という特殊な用語が詠み込まれていることが目につく。

次に懸詞によって機知に富んだ造型をもった歌は二首みられ、そのうち524の歌は氷室のヒに火を懸けて、氷と火との対句表現がなされている。528の歌も、やはり上下を対比して上面の平穏さと下面のつれない人を氷室にたとえている。

524 名にしおほ氷室の内にかにしてる氷のとけぬなる覧

528 とけねともうはなたらなる人かとよ名は氷室にて下は氷れる

また、氷室の水が如何して出来るかという興味から、氷室自体を内容としている歌は

513 夏まちていたす氷室はいにし年まかせし水のこほる也けり

525 冬さむみゐてし氷を埋置てはや氷室とはいふにそ有ける

527 夏の日の氷室と思へはあやにくにすすしき水の氷なりけり等である。以上のように、珍しい歌題を万葉語や特殊な用語等を使い、様々な視点からの詠法が見出せる。

△炭竈▽

堀河百首以前に取り上げられることの少なかったこの歌題の類型

表現をみてみると、「炭竈」は炭竈の煙が詠まれ、雪や冬の素材と共に「大原」「小野の炭竈」の歌枕を用いて、冬の寂しさや炭竈の煙の様子を写實的に叙景して詠まれていたものが多数を占めている。「小野の炭竈」は「相模集」268・546（『私家集大成』2・29）『曾丹集』364（『私家集大成』2・105）『拾遺集』114）に見られるのみである。それらを少なからず意識していたとみえる。

その中で、炭竈の煙を雪や雲に見たてたり、「炭竈の煙」を「塩焼蟹の煙」に、「小野山の煙」を「室の八鳥」に見違えるといって見たての詠法がみられる。

1081 すみかまに たつ煙さへをの山は雪けの雲とみゆるなりけり

1084 小野山に煙たえせぬすみかまをむろのやしまと思ひける哉

1088 須磨の浦に塩焼蟹の煙かともそまかへつる小野のすみかま

特徴ある詠法としては、「煙」の縁語、懸詞の「たつ」を用いて煙の心細げな様子から、述懐的な発想で詠んだものとして1079俊頼の歌を上げることができる。

1079 すみかまの煙ならねど世中の心ほそくもおもひたつかな

また、1074の匡房の歌にみえるように

1074 浦嶋のはこなれぬともすみかまは年のあくるをくゆる也けり

「炭竈の煙」を「浦嶋の箱の煙」に譬え、明けるは蓋を明けると年が明けるに懸け、「燻る」に「梅ゆる」を懸けて、歌の構成として浦島伝説を踏まえ、物語を基に観念的な新しい歌の世界を創り上げようとする姿勢がみえる。

へ埋火V

埋火は『和漢朗詠集』や『後拾遺集』にみえる歌題で、堀河百首においては懸詞、縁語を用いた詠法が数多くみられ、それらを整理

してみると、縁語で懸詞の「燃える」や「焦がる」に「恋がる」を懸けて、恋する情を表現したものは『和漢朗詠集』365にみえる。その類型化したものが多く、埋火の性質から上下を効果的に使い、上辺のつれなさや恋がれる心情の対照という表現によって忍恋が詠まれている歌が六首ある（1089・1091・1098・1099・1100・1104）。

また、1090の歌のように

1090 ほに出てまたおきながら埋火の舟ならねともこかれ社すれとあり、舟の縁語として帆・沖、漕ぐがあり、火の縁語「おきる」に「沖」、「焦れ」に「漕がれ」が懸けられ、これと同様な修辭は『相模集』374にみられ、それを基として思うように思える。

374 埋火もきみにもあらぬあまふねも冬はうきよにこかれてそゆく「おこす」に「起す」を懸けて、冬の夜の埋火の暖かさが詠まれた歌（1092・1103）があり、1101の歌のように埋火を囲むという冬の生活習慣を内容としている歌がある。

1101 埋火のあたりに冬はまどろしてむつかたりすることそ嬉しき次に、埋火を述懐的発想にて詠んでいる歌は三首みえる。1095の歌のように縁語、懸詞を用いて、世に認められない我身の不遇さを嘆いている。1094・1096のように埋火の消えゆきそうなはかなさを我身のはかなさにたとえてはいる。

1095 夜とともに下はこかるゝ埋火のうへつれなくて世をすくす哉
1094 埋火のきえなんとのみ思ふ哉いきてくゆれとかひしなけれは
1096 いかにせんはひの下なる埋火のうつもれてのみ消ぬへきみを
これらのように、埋火が述懐的に詠まれている歌は、『曾丹集』345や『相模集』（相模百首）561に見出すことができ、このことから先行の百首歌との影響関係を十分に窺うことができる。